



合并号

# 喫茶店文芸 2022年3月・4月合併号——目次

福原大輝

思い出の地図 1

山中隆二

ひな祭りチャンネル 7

福原大輝

詐欺師の彼女 13





# 思い出の地図

福原大輝

思い出の場所なんだ、ってパパは言った。どうやらここは、パパがまだ小さかった時、ちょうど僕くらいの歳の時に過ごした場所らしい。パパの実家——僕のおじいちゃんとおばあちゃんの家からは車で一時間かけてやって来た。どんな場所なんだろう。胸を高鳴らせて来たけど、そんな期待はどこかへ消えて行ってしまった。

寂しそうな街だなんて最初に僕は思った。僕が今住んでいるところと比べると、道が狭いし、人が歩いていない。住んでいる人がいるのかな、なんて不安に思っていたら、パパは大きめのスーパーのような場所に車を入れた。そこにはだだっぴろい駐車場があつて、多くはないけど車が停まっている。僕はほっと一安心して訊いた。

「ここどこ？ イオンみたいなのどこ？」

「ジャスコ」

パパはそう言いながら車をバック駐車している。ジャスコ、と僕が繰り返すとパパはいたずらっぽく笑った。きっと冗談なんだろうなと僕は考えた。

「ここ行くの？」

「いや、停めただけ」

「あー、いけないんだー」

「ママみたいなこと言うね。帰りに寄って何か買うから」

いつもそんなに笑わない、なんてことはないけど、今日はパパ嬉しそうな気がする。ここってそんなに好きな場所なんだ。

パパは車にピットリモコンを向けて鍵をかけた。振り返ると、スーパーの枠には見覚えのある赤紫色のカラーリングがあつた。

やっぱりイオンなんじゃないか。

パパは勝手知ったる様子で駐車場を出て、信号機のほうに向かった。赤信号で立ち止まって、ぼそりと言った。懐かしい。目の前には大きめのマンションが二つ。道路の左右に並んでいる。色は茶色でその外観はパパの実家のマンションに似ている。さっきまで実家にいたんだから、それに対する懐かしさではないはず。僕にとっては無機質なマンションが二つなんだけど、パパはずっとそれを見上げている。

懐かしい、ってどういうことなんだろう。僕も大人になったら分かるのかな。そんなにいいものなのなんだろうか。

信号が青になった。パパは考え込んでいる僕の手を引く。二つのマンションの間に続く道はかすかに下っている。目の前を橋が横切っていて、そこには線路が一本だけあつた。僕たちはその下のトンネルをくぐった。振り返って見上げて、電車が来ないかなと思っただけど、来る様子はなかった。

誰ともすれ違わないでその道を進むと右側にお寿司屋さんが見えた。チェーン店じゃないお寿司屋さん。でもそこから先は畑が多かった。今歩いている道からすると左右の低い場所に畑があつて、間違つて落ちてしまう人もいるんじゃないかな。おじいちゃんとかだと落ちそうだ。パパはそんな畑さえもうつとりと見つめているようだった。畑の中に時折、民家やアパートが現れる。いか悪いか見晴らしがよくて、全部の家が見渡せしてしまう。その中の一つをパパは指さした。

「あそこに住んでたんだ」

畑の中にあるこじんまりとした真っ白のアパートだ。二棟仲良

く並んでいる。

「どっち？」

興味もないけど僕は訊いた。

「奥の方のA棟」

やがて一つ角を折れると、そのアパートに近づいた。二階建ての真っ白のコンクリート壁、その一番上のところに黒いペンキでグリーンハイツと書かれていた。

「グリーンハイツ……」

「パパが住んでいた時は緑だったんだよ」

雨や雪に降られてペンキが剥げてしまったんだろうけど、グリーンハイツの外壁には少しもその跡を見つけることができなかった。名ばかりのグリーンハイツだった。その中央の一階の窓枠をパパは見つめていた。もしかしたらそこに暮らしていたのかもしれない。おじいちゃんやおばあちゃんも。おばさんーパパの妹も生まれていたかもしれない。けどそんなに見えていたら周りの人に怪しまれちゃうよ。

ふと後ろから視線を感じて振り返ると、そこにはほうきとちりとりを持っている女性がいた。顔にしわが多いからか、おばあちゃんより年上に見える。

「もしかして」

その後に女性はパパの名前を呼んだ。

アパートを見ていた。パパは振り返ると、すぐに表情をやわらげた。

「ナガマツさん、お久しぶりです」

ナガマツさんという女性は慌てた様子でほうきとちりとりをそ

の辺に置いた。

「いやあ、大きくなられて……。お母さんはお元気？」

「はい。もう今は子育ても終わって暇そうですね」

「次は」

ナガマツさんは僕のほうを向いた。

「この子の番ね」

「そうですね……。あまり母のところには連れてこれてないんですが……」

パパとナガマツさんが話していると、グリーンハイツのもう一つの棟から物音がした。ボタンと閉められた扉の音の後に階段を駆け下りる音。その後に顔を出したのは、茶髪を肩まで伸ばした男性だった。パパよりは少し若いんだろうけど、その表情は長髪に隠れて見えにくかった。でもこちらをじっと見つめていることは分かった。パパもその人を見つめていて、やがて声を出そうとしたそのときに、その人は車に飛び乗り、去って行った。

「今のって……ヒロくん？」

ナガマツさんはうなずいていた。

「ちっちゃい時に話したことあったかしら」

「少しだけ……」

パパはナガマツさんの方を向いているけれど、その意識は車の方に向かっていくようだった。

ナガマツさんの後ろの方で女の子が、おばあちゃん、と呼んだ。ナガマツさんは振り返って笑顔を見せた。

「ではまた」

パパとナガマツさんは同じようにそう言った。ナガマツさんが



ほうきとちりと리를もって颯爽と孫のもとへと向かっていく様は、おばあちゃんというには凜としていた。

「ナガマツさんはどういう人なの」

畑道を進んでいるときに僕はパパに訊いてみた。

「近所のおばあちゃんだね。たしかパパより年上と年下の子供がいたと思う……。一回おばあちゃんと行き違いになって家に入れなかった時、家に上げてもらったことがあったな」

「そうなんだ。ヒロくんは？」

うーん、とパパは苦笑いしながらうなっている。

「ペア登校っていつて、一年生の子と上級生と一緒に学校に行っていたんだけど、パパが六年の時のペアの一年生がヒロくん。一緒に行くこうとしているのに、離れて走り回ったり、勝手にパパのリコーダー盗って、畑の中に投げたり、いろいろされた」

ヒロくんの風貌と、その話が重なって僕は少し笑ってしまった。でも、やっぱりなヒロくんがなぜパパの担当になったのだろう。

「ヒロくん、パパのほうを見てたと思うよ」

「うん、目が合ったから分かるよ」

「話さなくてよかったの」

「うん……、忙しそうだったからいいんだよ」

畑が続いている中に、公園があった。僕の家の近くよりはずっと小さな公園だけど、子供たちがたくさんいた。この街の子供たちは外で遊ぶんだ。

「少し休憩しようか」

パパは公園に入って、すぐのベンチに座った。近くの子供たちはゴムボールを互いに投げつけ合っていた。かと思いきや、突然

一斉に走り出してブランコの柵に手を当てる。そしてまた戻ってきてゴムボールを手に取る。これはどんな遊びなんだ。頭に浮かんだ疑問とは別にパパに訊く。

「ここで遊んだことあるの」

「うん、何回も」

「何して？」

「うーん。なんだろう」

パパは奥の方にあるブランコや滑り台、その奥にある記念碑のようなものを見つめていた。

「この子たちとあんまり変わらないんだろうね」

目の前の子供たちはゴムボールを投げつけ合ってどこかへタチしに行く遊びに夢中になって続けている。これってどういうルールなの、この街の遊びなの、とパパに訊こうとした時、パパは立ち上がった。

「ちよつとパパ行ってくるから、休んでいいよ」

「どこに行くの」

「知っている人に会いに行ってくる」

パパは公園を出て左に曲がった。足取りは軽く、息が弾んでいるように見える。

僕は変な想像をし始めて、もしかしてパパが好きだった人なのかな、と思い始めた。一回そう思ってしまくと、もう変えられない。もし浮気でもしたら、と思って僕は目を光らせていた。公園から見て二、三軒となりの立派な家にパパは入って行く。出迎えたのはどんな人なんだろう。それを見ようとしたその時、

「なあ」

僕の目の前には、僕より少しだけ背だけが大きい男の子が立っていた。確かゴムボールの遊びをしていた子の一人だ。

「何？」

「もう一人いたらこの遊び楽しくなると思ってさ、一緒にやろうぜ」

男の子は気が強そうなのに、その手を伸ばした時は少し照れ臭そうにしていた。シャイなガキ大将だ。

「僕、その遊び分かんないよ」

「大丈夫だよ。すぐ分かる」

入ってみると、この遊びのわからなさ具合が面白かった。二チームにわかれてゴムボールを投げ合う。その最後にボールに触れた人がどこか場所を宣言する。それはブランコの柵だったり、滑り台の頂上だったりする。それを聞いたらすぐさまその場所を目指して走って、一番最初にタッチした人が、最初にボールを投げられる権利を持つ。そしてすぐさま広場に戻ってゴムボールを投げ合う。ゲームは無限ループする。どうやったら終わるんだ。そう気づいたときには僕はそのゲームの一員になっていた。

意味を考える前にゲームは進行し続ける。

とうとう僕が最後にゴムボールに触れてしまっ、僕は滑り台と叫んだ。叫んだ人は行く場所が分かっているから、最初にそこに到達しやすい。よくできたゲームでもある。

きつと何十回も繰り返し返した後、僕は横目で、ガキ大将の彼を見た。滝のような汗をかいている。彼も僕を見つめ返した。ふっと笑ったと思ったら、最後のボールに彼が触れた。彼はよく息を吸い込んでから、大声で宣言した。

「地面！」

全員が察して、その場で寝ころんだ。全員の呼気が空に舞って、漂う。僕たちは空を見上げていて、お互いを見てはいなくてもその存在を認識していた。徐々に呼気のリズムが落ち着いてきて、全員の息が整ったところで、一人が笑いだしたので、みんな声をそろえて笑った。

五時のチャイムが鳴りだした。みんな立ち上がって砂も払わずに、じゃあねと言いつつ、公園を出ていく。ガキ大将の彼が僕に向かって手を差し出す。

「また遊ぼうな」

僕は少し考えたけど、その手を握ることにした。また遊びたいという気持ちは本当だったから。

みんなが公園を出て行った後、僕は服についた砂を払った。ふと目を上げると、僕がさっきまでいたベンチにパパが座っていた。いつもの笑顔で僕を見ている。パパは僕が砂にまみれていようと怒らない。怒るのは決まってママだ。

しかし、その笑顔が寂しそうに僕には見えた。

「会えなかった？」

パパはすぐ残念そうにうなずいた。僕は遊んだ勢いよろしく、次々と訊く。

「誰に会おうとしたの」

「ひなちゃんっていう同級生」

やっぱり女の子なんだ。

「何して遊んだの」

するとパパは周りを見渡した。

「この公園にも来てたよ。すぐそこのおうちだからね」

パパは一度息を吐きだした。

「何してたんだっけな……」

パパは珍しくなんとも言わなくて、公園の中に視線を漂わせていたけど、やがて明るさを取り戻しているように感じた。

「懐かしいんだ」

僕は一言でそう言った。本当は、パパはその子のことが好きだったんでしょ、と言いたかった。けれど、パパの気持ちを例えるのはその一言で十分だった。その気持ちは僕には分からないものだけど、パパは今日ずっとそういう気持ちを持っているということは、見ていると分かる。

「懐かしいってどんな気持ち？ そんなにいいものなの？」

パパは穏やかに笑って、僕に近づいた。いまさらのように僕の服についた砂を払い始めた。きつとママに怒られちゃうからなんだろうな。パパは答えないままに、砂を払い終えた。

「行こうか」

パパは僕の手を引く。それを見上げた僕の顔にパパは言った。

「もしかしたら、いつかここにもう一回来たいなって思うかもよ。それが……」

ええー、こんなに何もなくて畑ばかりのところ、と僕は思ったけど、やめた。さっきまでいたガキ大将と仲間たちを思い出したら、そんな気がしてきたからだ。もうきつと彼らとは会えないんだらうけど、それでもずっと覚えていて、この日のことを思い出したり、そしてまた会いたくなってふと思ったりして。

この街は、パパにとって生きてきた証だったのだろう。

帰り道、夕方なのにいろんな場所に立ち寄っては、パパは思い出を話した。場所は暗くて見えなくなっても、そこであったことは鮮明にパパが話してくれた。帰り着いたのが夜中になってママにこっぴどく叱られた。

それはいいとして、帰りの車の中で、思い出はどんなものよりも価値があるんだってパパは言った。言った後で恥ずかしそうに笑っていたけど、僕はもうそれを笑ったりしなかった。

僕は今日あったことを地図に残しておこうと思う。パパと一緒に歩いた街の地図と、そこで出会った人たち。パパが前に住んでいた家の近くに住むナガマツさん、とそのお孫さん。隣の棟に住んでいたペア登校のヒロくん。そしてガキ大将と仲間たち。彼らの似顔絵と言った言葉、そしてあの面白い遊び。それを鮮明にいつでも思い出せるように、いつまでも忘れないように僕は絵を描いた。パパが会いたかったひなちゃんのこととは、ママにばれたら怒られそうだから、描かないで置いてあげるよ。そのかわり、鳥の絵を小さく描いておいた。今はどこかに飛んで行っちゃったかもしれないけど、いつか戻ってきて会えればいいね。





ひな祭りチャンネル

天野満

「このままやったらワシらは終わりや！ どないかせな！」

左大臣が怒鳴った。顔に浮かび上がっている無数の血管が今にも破裂しそうだ。

「ちょっと、左さん大声を出されるな。お内裏さまたちの御前ですぞ」と、右大臣が左大臣をなだめる。

「よい。気にするな。左大臣の申し立ておすることはもったものだ」

お内裏は内心を押し殺して言った。ほな、左大臣、具体的なアイデア出さんかいボケナス。お前、ひな壇に入るための面接で「私は御社に貢献したいと考えています」だのテンプレみたいなセリフほざいとったやんけ、その気持ちはどこ行つたんじゃ、アホンダラ。本当はそう言つてやりたかつた。

「昔はもつとひな祭りに活気があつた。それが今ではこの有様じゃ。どうして、どうしてこうなつた」左大臣がワツと泣き出し、泣くなよカス、とお内裏は左大臣に対するいらだちをつのらせた。

——文化の西洋化、長引く不況がもたらした家計の圧迫、少子化。種々の事情によって、雛人形たちの存在は脅かされていた。今や雛人形を飾る家庭も随分と減少しており、このままではひな祭りの文化が消滅してしまうのでは、と雛人形の同さ危惧していたのである。

「お内裏さま、僭越ながら進言させていただきたくございます。

Youtube チャンネルを開設いたしましょう」

「なんと！」

お内裏が目を丸くした。

「貴様、どういうつもりか！ 西洋にかぶれるとは正気を失つたのか！」

左大臣が右大臣に食つて掛かる。

「逆転の発想にございます。文化を守ることに腐心するのではなく、時代の変化を取り込むのであります」

「ふざけるな！ 我ら誇り高き日本の雛人形がそんな真似できるか！」

「ではアナタは、我らの滅亡を指を咥えて見ていると申されるのか。私は嫌です。今こそ、ひな祭りを歴史を変えるときなのです」ぐむう、と左大臣が言葉に窮した。

「良きにはからえ。右大臣」

「ありがたき幸せにございます」

お内裏の言葉に対し、右大臣は深々とこうべを垂れた。

Youtube チャンネル開設から三ヶ月が経つた。チャンネル登録 8

者は一人、提携している五月人形チャンネルのみ。動画の視聴数は12回。コメント欄には海外からのスパムと怪しげなビジネスセミナーからの勧誘が並ぶばかりであった。

「そらみたことか、全然ダメじゃねえか」

何もしてないくせに偉そうにしている左大臣の頭を叩いてやりたい気持ちをグツと堪えて、お内裏は右大臣に尋ねる。

「右大臣、首尾がよくないようだが」

「承知しております。やはり動画が地味なのかと」

「えっ、マジ？ 地味かな？」

お内裏は立場も忘れて、アホのように碎けた喋り方をした。右大臣が Youtube チャンネル開設を提案したのち、度重なる会議を重ねて、満を辞して送り出した動画がウケないわけがないと

思っていたからである。

「今掲載してるのが〈ひな祭りの文化と歴史〉〈ひな祭りの未来〉の二本ですが、誰も興味がないのではないかと思います。長いうえに、安っぽいスライドショーの垂れ流しのような具合でございますので」

「では派手な動画を作れと申すわけか。例えば、金色堂の如き絢爛な雛人形たちの紹介するなどしろ、と」

「いえ、派手なものがそこら中に転がっている現代においては、我らの想像する豪華さなど豪華さにあらず、はつきり申し上げれば地味です。もっと短く、見栄えのする動画を製作してみては」

「何か案があるのか」

「ぼんぼりを爆破する動画にございます」

「たわけたことを抜かすな！」

「私の調べによれば、Youtubeではメントスコーラなる動画が爆発的に流行っていたそうでございます。炭酸飲料に空気のたくさん入ったお菓子を入れることで、飲料が天高く吹き出すという大変シンプルな動画であります。短く見栄えのする動画のお手本にございます。ぼんぼりの爆破は我らのメントスコーラ。アホな小学生が歌って腹もよじれんばかりに笑っている、あの愚劣な替え歌の世界を顕現させるのであります」

「しかし、右大臣よ、ひな祭りのチャンネルであるからには、ひな祭りを広めるための動画を作らねばならぬのでないか」

「たしかに本分とはかけ離れてしまうかもしれませんが、まずは視聴者数を増やすが得策かと」お内裏からの素朴な疑問に右大臣を淀みなく答えた。

「ならぬならぬならぬ！」

「では左大臣殿はどうされるのがよろしいとお考えでしょうか？」言葉に窮した左大臣を見て、お内裏が右大臣にゴーサインを出した。

「右大臣、でかしたぞ。ぼんぼり爆破の動画、再生数、がうなぎのぼりではないか！」

「ありがたいお言葉。しかしながら、今回の功労者は左大臣殿にございます」

右大臣は空席になっている左大臣の席を見つめながらいった。彼は右大臣の提案したぼんぼり爆破作戦を食い止めようとして、爆発に巻き込まれた。幸い命に別状はなかったものの、ポカンと一発ハゲ頭になってしまい、ショックで病欠していた。

「しかし、肝心のひな祭りの歴史などの動画の再生数は伸びておらんのか」

「まだ、視聴者の母数が足りていないのでございましょう。ご安心くださいませ。次の作戦はもう考えてあります」

右大臣の聡明さにお内裏は感激を隠せず、してそれは、と提案をせかした。

「次の動画では五人囃子に殺し合っていたきます」

「へ？」

絶句するお内裏。

「いやいやいや、右大臣さんよ、それはダメだしよ、でしよ、だしよしよ」

「お内裏テンパリすぎワロタ、と」

「ちょ、SNSに私の動画拡散しないでよ」

「こういうのがウケるんですって。あと左大臣のことを〈老害上司にパワハラされたからリベンジした話〉って動画も作ったんですけど、それもウケてますよ」

「チャンネル開設の本分からどんどん離れていってる気がするのだが」

「いやいや、物事の途中経過なんてそんなもんっすよ」

お内裏は右大臣の口調がだんだん砕けていくことに不安を感じていた。

「炎上してるじゃないか」

「五人囃子はみんな未成年なうえに、内容が暴力的すぎてYoutubeの規約に違反しまくってましたからね、でも、動画再生数、一千万回突破しましたよ」

「再生数伸びた、って、ダメだよ。チャンネル解説の本分はどこに行ったのよ」

「有名人ともなれば一回の炎上くらいよくある話ですって。チキったら負けっすよ？」

「もう放ってはおけぬ。右大臣よ、貴様をひな祭り広報担当より解任いたす」

「へえ、解任するんですか」

パンパン、と右大臣が手を叩くと、そこら中の物陰から物々しい連中が武器を片手に現れた。

「これは何事か！」

お内裏はあっけなく、右大臣の手下に拘束された。

「お内裏、このウドの大木野郎。てめえはひな壇から追放だ。そして、俺が新お内裏として新しいひな祭りの歴史をつくるのだ」  
「愚か者が！ 力に飲み込まれおって！ ひな祭りの本分を忘れたか」

「力がなければ、何を言っても無駄だ。テメエも惨めな左大臣と同じ、惨めなハゲ頭になりやがれ」

右大臣が爆弾ぼんぼりに火をつけた。

「だ、誰か助けてえ！」

「待てい！」

お内裏の耳に聞き覚えのある声が届いた。左大臣の声だった。

「さ、左大臣！？」

左大臣の風貌を見てお内裏は大層驚いた。左大臣は全身をギンギラギンのサイボーグに改造していたのである。

「左大臣などという名前は、ぼんぼりの爆風の中に捨ててきた！今の私はひな祭り戦士オヒナマンだ！」

オヒナマンは右大臣の手下にヨコブエソード、ツツミキャノンなどの兵器を叩き込み、バタバタと倒していく。

「右大臣、貴様の野望は終わりだ！ 私が正しいひな祭りを守ってみせる！」

「クソッ、覚えていろよ！ オヒナマン！」

右大臣は捨て台詞を吐いて逃げ出そうとしたがそれは失敗に終わった。殺し合いで死んだはずの五人囃子たちがサイボーグとして復活、行手を塞いでいたのである。

「右大臣、この野郎！ よくも！」

五人囃子たちにしばき回されて、右大臣はとうとう観念し、お

縄についた。

一連のひな祭りをめぐる動乱はライブ配信として、世界中に配信されていたのである。

散々ネットを炎上させ反感を買っていた右大臣を失脚させたことにより、左大臣や五人囃子たちは一役ヒーローの座に登りつめた。

彼らのサイボーグ的な見た目が受けたのか、アニメ化や映画化の依頼が殺到、その影響により、ひな祭りは世界に知られる文化となった。

そして――。

お内裏は以前より、以前より豪奢になったひな壇に座りながら思った。

右大臣は確かにひな祭りの歴史を変えたのだ、と。

たしかに右大臣は最終的に悪人になったが、奴の功労無くしてひな祭りの文化は存続しえなかっただろう。ともすれば悪人になることも含めて全て右大臣の計算だったのではないか、とさえ思った。

「褒めてつかわす」

お内裏は一人つぶやいた。どこかからかすかに、ありがたき幸せ、と聞こえたような気がした。(終)





# 詐欺師の彼女

福原大輝



研究室で後輩の女の子が声をかけてきた。僕は目の前のディスプレイに集中し始めたときだったので少しイラついたけど、彼女のいる右側に顔を向けた。

僕たち数十人の研究員はデスクを向かい合わせにくつつけて座っている。彼女は僕から一つ飛ばしの席に座っていて、こちらをじっと見ていた。その真ん中にいる同僚は、また始まったというように、苦笑いをしながら席を立つ。

彼女は悪びれもせず、椅子を回してこちらに向き直った。

「わたしが詐欺師の妹分だと仮定しましょう」

彼女はいつも唐突に、こういうわけがわからない話を始める。

「だったら何？」

先日、ニュースでこういうことがあったんです、と彼女は続けた。

「海難事故があったときに、救助作業で海底を探索するんです。そのときに船の乗組員ではない人がよく見つかります。それって政府がひどい殺人犯とか法を犯した人を沈めているっていうことらしいんですよ」

そんなニュース、僕は知らないし、テレビで放送できるのかと思った。だけどそんなこと彼女に言ったって関係ない。

「うん、それで？」

「先輩はどう思いますか？」

「いけないことだと思うよ」

「ですよ」

彼女はうんうんとうなずいている。話の行き先が見えなくて僕は訊いた。

「さっきの詐欺師の妹分とはどういう関係があるの？」

「そうです！」

彼女は席を立って近づいてきて、僕の顔に当たってしまったような距離で人差し指を向けてくる。危ないからやめてほしい。

「よく気が付きましたね、先輩。それが大事なのです」

「大事？」

「そうです。政府が海底に犯罪者を捨てていること。それを行っている人間は誰だと思いませんか？」

「政府の役人さんじゃないの？」

「違います」

彼女はちゅちゅと指を振る。その反対の手はせわしなく鉛筆を動かしていて、僕の机上にある書類に何やら書いている。本当にやめてほしい。

彼女はしばらくもったいぶってから言った。

「それを任されているのが、わたしたち詐欺師なんです」

「……そうだとするとそれを大きな声で言っているの？」

「いいんです。ここに盗聴器がないことは確認したので」

「それはよかったね」

「とにかく海底に死体を沈めているのはわたしたちなんです」

「それって詐欺師の仕事なの？」

「そうなのだから仕方ないのです」

彼女は人差し指を立てて、自信満々な様子だ。

そのとき、携帯電話のアラームがこかしこで鳴り始めた。緊急時のそれで、みんなの携帯分が集まれば頭をつんざくような轟音だ。

地震です、とAIの音声が続り返した。とたんに僕は揺れを感じた。

地震か、と口々に言い、まわりの研究員たちはデスクの下に潜り込む。僕たちも同じようにする。一つあたりのデスクの下は広いはずなのに、彼女は僕と同じ席に入り込んできた。しかしとっさのことなので咎めることができない。

彼女は机の下で姿勢を正すと、また目を合わせてきた。

「さっきの続きをしましょう」

「いまそこらじや」

「この警報が、わたしが所属してる詐欺師の仕業だとするじゃないですか」

「本当は地震じゃないってこと？」

周囲で地震じやないってこと？ 揺れが大きくなり、タンスの本がずべて落とされる。その音に気にも留めずに彼女は続ける。

「そうです。研究所の人たちを驚かしているんです」

「詐欺師ってもっと静かにばれないように行動すると思ってたよ」

「珍しい詐欺師なんです」

「何が目的なの？」

「研究所を乗っ取るのが目的なんです」

「それで？」

「お金になりそうなデータがあったら持っていきます」

「そんな金になりそうなものないでしょ」

揺れがさらに激しくなり、僕たちが話していられないほどになった。

そのとき、とっさにつかんでいた紙切れに気が付いた。それはさっき彼女が落書きしていた書類だった。何気なくそれを見ようとしたとき、彼女が横で言った。

「今見ちゃダメです」

「なんで？」

「この警報が鳴りやんだら見ていいです」

「君たち詐欺師が退散しないと鳴りやまないんじゃないの」

彼女はめずらしく目をそらした。僕は不思議に思いながらも続けて言った。

「やめさせるように連絡してよ」

「わたしは裏切り者なのでもう連絡できないんです」

何して裏切ったんだよ、そう言おうとしたそのとき、「危険なので研究所の外に逃げてください」と、所内にアナウンスがあった。

確かに先ほどの規模の揺れはおさまったかに思える。外に逃げるのは今のうちかもしれない。

まわりの研究員は研究室の外へと出始めた。僕は外に出る前に彼女に確認した。

「これでもしかして君たちの罠なの」

彼女は咳払いを一つする。

「罠ですけど、いうこと聞かないほうがもっとひどい目に遭うので逃げましょう」

「わかったよ」

僕たちは本がばらまかれている床を踏み、研究室を出て、階段を駆け下りていく。研究所の外に広がる草原に研究員たちは集

まっていた。

研究所は街のはずれの高台にある。夕日がさす向こう側を見渡すと海が見えた。波が荒れている。

今現在の揺れは大きくないけれど、地響きが続いていた。

夢中で走ってここまで来たので、左手にはやはり彼女が落書きした紙切れを握ったままだった。もう見ていいか、確認しようとしたとき再びアナウンスが鳴った。

「気象庁の調べによると、震源の深さは約8キロ。この地震による津波の心配はありません」

無機質な音声が広がっていく。

——やっぱり地震じゃん。

隣にいる彼女の顔を見ようとしたら、彼女は目をそらした。

「ねえ、この紙まだ見ちゃダメなの？　いつそのこと返そうか？」

彼女はこちらを見ない。

風が渦をまくようにあたりに吹いている。草原がそれを受けて揺れ、足元を撫でる。真っ白い鳥の形をした雲が悠然と空を飛んで、研究所の屋根についた避雷針にぶつかった。金属音が聞こえたような気がした。

ねえ、と彼女に呼び掛けても、彼女はまだこちらを向かなかった。とそのとき、

「おーい」

彼女は虚空に向かって手を振った。まだ続いているのかと思っただが、同じ方向を見上げると、鳥の形をした雲の中から、パラグライダーのような乗り物に乗った人間が颯爽とこちらに向かって降りてくるのが見えた。

僕は思わず手の紙切れを見た。

「もうわたし行きます。いつもわたしの変な話に付き合ってくれてうれしかったです。さようなら」とともにかいけつゾロリの顔が描かれていた。

「ちょっと、待って！」

僕は叫んだけど、駆け出した彼女はもう振り返らなかった。



**喫茶店文芸**

**2022年3月・4月合併号**

**監修：マサユキ・マサオ**

**編集：氷川省吾**

**HP**

**<http://literarycafe.wp.xdomain.jp/>**



2022年  
3月・4月合併号